

口蓋裂による咀嚼障害の歯科 矯正治療の研究

東京医科歯科大歯学部

三 浦 不二夫

顔面口腔領域に発現する唇顎口蓋裂（以下略して口蓋裂という）は、その頻度、侵襲の程度からいっても注目すべき先天異常のひとつである。

わが国における口蓋裂の発現頻度は、欧米コーケシヤ系白人に較べると高率であって、400～500回の分娩に1回の割合であり、白人の700回に1回の頻度よりも多いことが知られている。本年度の調査は、主として育成医療受診状況について新潟市を中心に行なったものであり、その結果では、600回に1回程度というやや少ない数字をえているが、被調査年令に至るまでの患者の死亡や、育成医療を受けない者も加味すれば、従来発表されていた数値と異なるものではない。

上唇あるいは口蓋の裂奇形については、それぞれ生後の適当な時期に、口腔外科、形成外科、耳鼻科医等によって閉鎖手術をうけるが、その欠損部の程度によっては、二つの大きな機能障害を残すことになる。

そのひとつは、すでに「口腔に関する医療」として育成医療給付の対象とされている音声言語障害である。

もうひとつの障害は、歯列の不正による咬合、咀嚼の障害である。

口蓋裂患者にみられる不正咬合は、裂そのものによる。歯の先天的欠如、形態異常、位置異常にとどまらず、むしろ裂の閉鎖手術による二次的変形が大部分を占めるものである。すなわち、上唇の縫合によって、上唇の緊張が強くなり、上顎歯列弓の前後の変形を来し、また、硬軟両口蓋の閉鎖手術による左右顎堤の接近によって、著るしい狭 を示すことである。とくに後者は、口蓋の痕形成が著るしく、殆んど上顎の發育を阻止してしまうものようである。

これによって、咬合は上顎歯列が長径と、とくに幅径において狭小な、見かけ上の下顎前突タイプをとり、顔面中央部の陥凹感が一層強調される結果となるのである。患者および家族は、成長につれてその機能的ないし、審美的障害に苦悩することになるのである。

今日、唇裂あるいは口蓋裂の閉鎖手術を受けない患者は殆んど皆無であって、何れかの医療機関において外科的手術を受けている。

これによって、まず唇の醜形を直し、同時に哺乳栄養の問題、ついで言語の問題の改善が計られているのであるが、咀嚼障害の問題は、乳歯から永久歯の萌出にかけて、次第に咬合状態が悪化してゆくにかかわらず、その矯正治療を受けるものの数は極めて少ない。

昭和53年度中において、東京医科歯科大学、大阪大学、新潟大学および昭和大学歯学部付属病院のそれぞれの矯正科外来を訪れた患者数の概略

1. 総 数	268 名	
2. 唇顎口蓋裂	220 名	82.0 %
唇(顎)裂	23 名	8.6 %
口 蓋 裂	25 名	9.3 %
3. 男 子	160 名	60 %
女 子	108 名	40 %

4. 初診年令は、医歯大例では7才~13才までが多く、とくに8~10才が圧倒的である。また阪大の資料では7才にピークがみられた。いずれにせよ、初診時期は、上下顎4切歯が交換し、咬合状態の異常に保護者が気付いた項集中するとみられる。

難易度の判定

口蓋裂患者のもつ咬合状態の矯正治療の難易度の判定は、極めて困難なものであり、本年度中においては、いまだ共通の方式をえていない。しかし、この判定の中で重要な決め手となるものは、Roentgenoccephalogramによる分析と模型分析によるものであろうことは、想像に難くない。問題は、これらの資料の計測項目として何をえらび出すかによると思われる。

- 1) Cephalometry としては、一般の矯正患者に用いる方法のうち、とくに
LSNA、SNB、SNP、ANB、(図)
- 2) 模型計測上からはoverbite、overjet、個々の歯の位置異常と
- 3) Caries activity, hypoplosia
- 4) 患者、家族の Co-operation

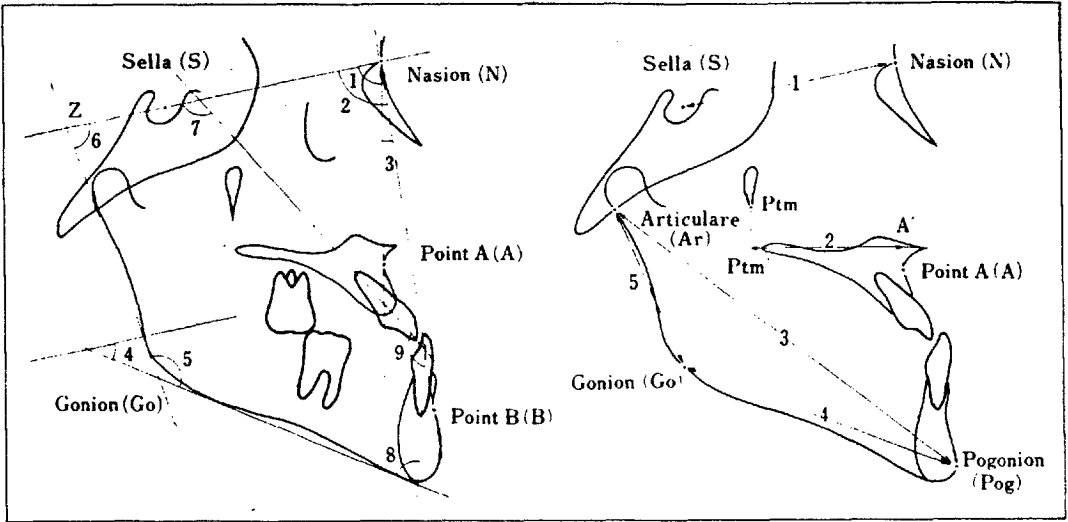
などが一般的に考えられ、54年度以降の研究テーマになろう。

これらの severity index は将来、口蓋裂の不正咬合の矯正治療の育成医療導入等の際の診療報酬の算定基準の設定などにも重要な指針を与えるものと思われる。

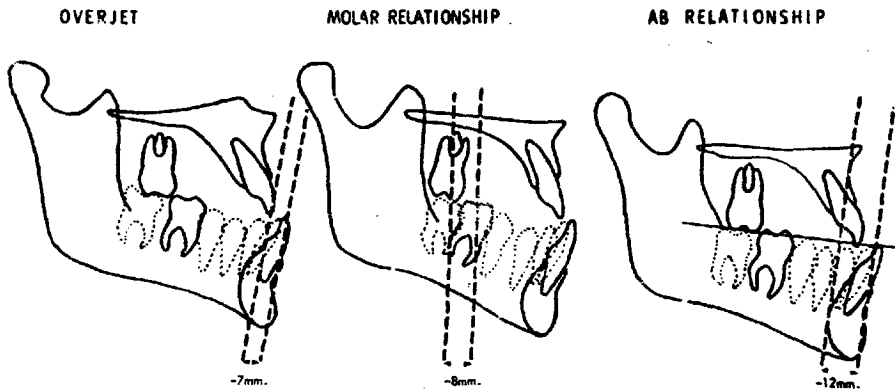
治療法について

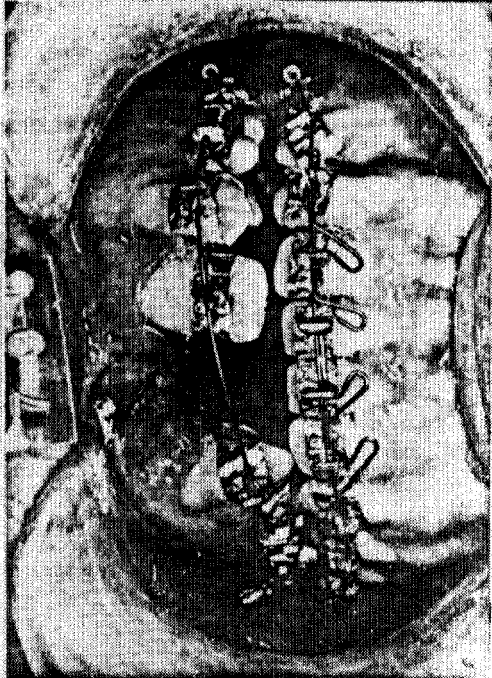
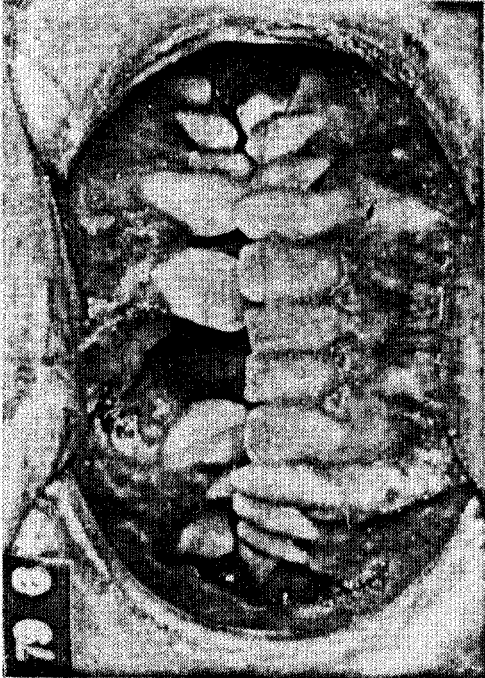
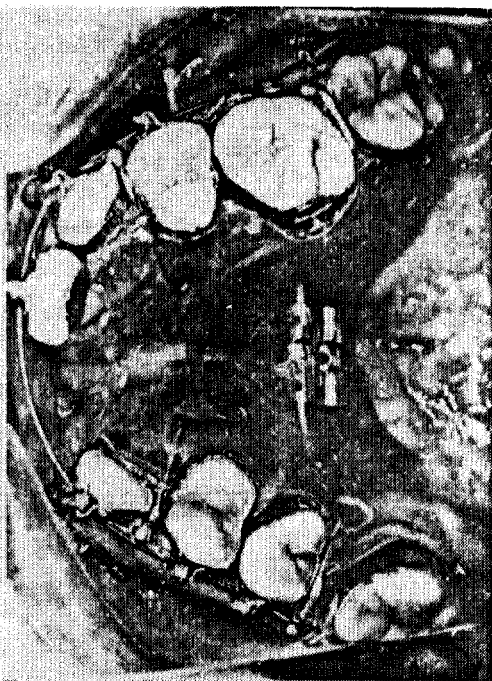
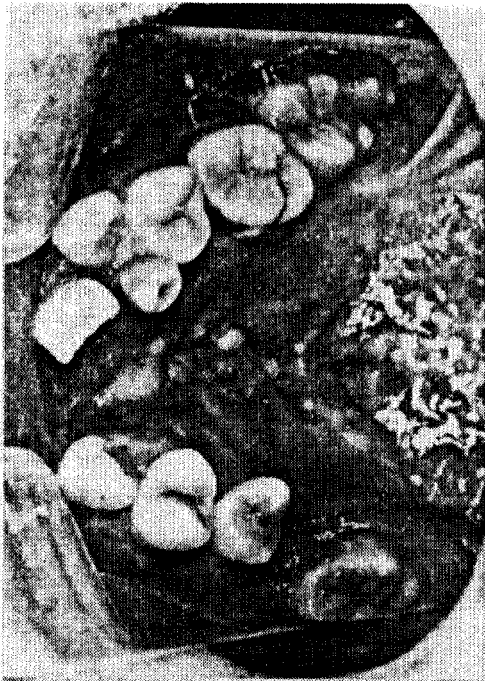
唇(顎)裂、単独のものについては、一般の矯正治療に準じた方法が考えられる。口蓋裂単独のものについては、側方拡大がこれに加わる。しかし、唇顎口蓋裂については、上記のもの複合のほか、上顎歯列の前方・側方拡大、下顎の成長抑制などが加わり、歯科矯正治療中、最も困難なものひとつとされている。

とくに、この唇顎口蓋裂の矯正治療について、またその予後等の問題を含めて、54年、55年等にわたり、継続的研究が必要である。



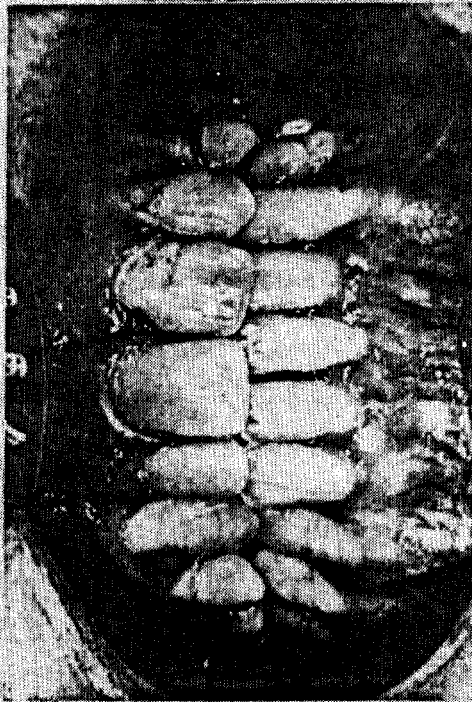
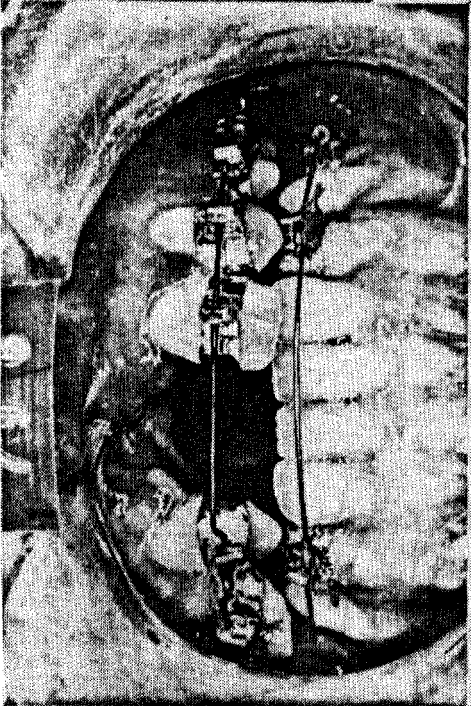
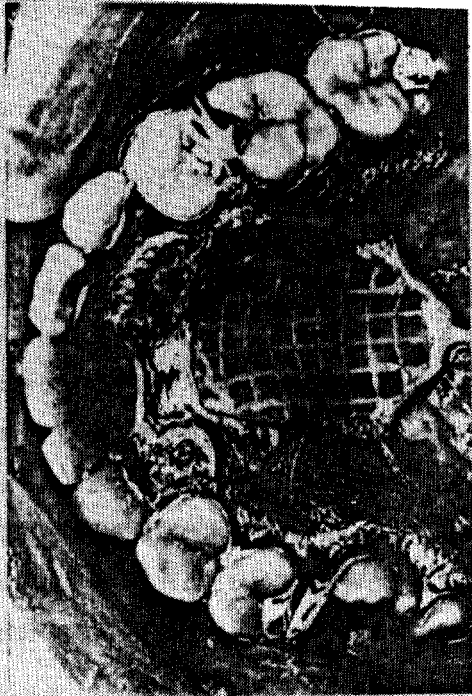
頭部 X 線規格写真における計測項目





A

B



C

D

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

顔面口腔領域に発現する唇顎口蓋裂(以下略して口蓋裂という)は、その頻度、侵襲の程度からいっても注目すべき先天異常のひとつである。

わが国における口蓋裂の発現頻度は、欧米コーケシャ系白人に較べると高率であって、400～500回の分娩に1回の割合であり、白人の700回に1回の頻度よりも多いことが知られている。本年度の調査は、主として育成医療受診状況について新潟市を中心に行なったものであり、その結果では、600回に1回程度というやや少ない数字をえているが、被調査年令に至るまでの患者の死亡や、育成医療を受けない者も加味すれば、従来発表されていた数値と異なるものではない。